



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2731 号 2015.11.21 発行

### 那須・那須塩原 つながるひろがる障害者アート 進化続け7年目



東京新聞 2015年11月20日

主会場に飾られた障害者の作品=那須塩原市で

知的障害者が制作した芸術作品の企画展「つながるひろがるアート展N a s u」が25日まで、那須塩原、那須両市町の計14施設を会場に開かれている。障害者支援施設の男性職員のアイデアで始まり、毎年規模を広げてきたこの試みは、今年で7回目を迎えた。多くの人に作品を鑑賞される経験は、作り手の喜びややりがいにつながっている。（大野暢子）

飾られているのは、那須町の障害者支援施設「マ・メゾン光星」の利用者ら約二十人の絵や立体作品など約百四十点。那須塩原市の画廊ギャラリーバーンを主会場に、ホテルや店舗などが会場を提供している。

企画の発案者は、マ・メゾン光星の職員佐藤謙太郎さん（49）。東京都出身で、もともと建築会社に働いていたが、転勤で移り住んだ宇都宮市で参加した障害者施設でのボランティアにやりがいを見だし、十九年前に今の仕事へ転職した。

「当時、施設には月一度、利用者が絵を描く時間があったのですが、出来上がった作品の色使いや構図の独創性に驚きました」と佐藤さん。美術鑑賞が趣味だったため、長年各地の展覧会に足を運んできたが、巨匠の影響を受けたと思われる絵からは真新しさや魅力を感じなかったという。

美術教育を受けたことのない利用者の作品に強い個性を感じ、施設側に頼んで絵画の時間を月二回に増やしてもらった。「あなたはクレヨンの画材が向いていますね」「花の絵が得意なので、たくさん描いてみましょう」などと助言するうちに、格段に上達する人や絵画に親しむ人が増えた。

「質の高い作品を発表する場をつくろう」。こうした思いが地元のアート関係者とも一致し、企業や個人の協賛を得て二〇〇九年から企画展をスタート。今年の会場数は当初の倍に増え、施設利用者らのデザインしたマグカップやTシャツ、画集などの商品を会場で販売できるまでになった。

出品者の一人、指田（さしだ）邦雄さん（55）は、地元ホテルの協力を得て、これまで百回以上繰り返し描いてきた題材「二人の怪人」をプリントしたTシャツを完成させた。「たくさんの人に見てもらえる企画展は、毎年とても楽しみ。これからもたくさん描く」と顔をほころばせた。

施設利用者以外にも、那須塩原市在住で、県芸術祭洋画部門で準大賞に輝いた経験のあるダウン症の清野（せいの）ミナさん（29）も出品している。各会場とも入場無料。休館日や会期はそれぞれ異なる。問い合わせは、マ・メゾン光星＝電 0287（77）1013＝へ。

## 誰もが芸術楽しむ3日間「バラフェス」開幕

佐賀新聞 2015年11月20日



大勢の来館者が訪れた「バリアフリーさが映画祭」の会場＝佐賀市のアバンセ

障害の有無や年代に関係なく、多様な芸術に触れる「バラエティ・アート・フェスタさが2015」(バラフェス)が20日から22日まで、佐賀市のアバンセで開かれる。誰もが一緒に文化を楽しむ社会づくりをテーマに、映画祭やステージイベントなどさまざまな催しがある。

20、21の両日は「バリアフリーさが映画祭2015」と題し、視覚、聴覚に障害のある人や、子どもから高齢者まで幅広い世代が楽しめるよう、副音声と日本語字幕をつけて計5本を上映する。21日の「くちびるに歌を」の上映前には、嬉野高生徒による手話パフォーマンスもある。

22日は、唐津市出身の篠笛奏者・佐藤和哉さんと、知的障害者によるプロの和太鼓集団「瑞宝太鼓」(長崎県)が共演。障害福祉作業所の利用者らでつくる「JOY倶楽部」(福岡市)の演奏や、ワークショップで練習を重ねてきた創作ダンスが披露される。県内の障害福祉サービス事業所などがつくる食品や雑貨販売(21、22日)もある。

映画祭は有料。佐藤さんと瑞宝太鼓のステージは当日午前10時から配布する整理券が必要。問い合わせは県文化課、電話0952(25)7236。

## 知的障害者サッカー日本代表監督は266ゴールの男

朝日新聞 2015年11月20日



西真一さん

■知的障害者サッカーの日本代表監督に就任した西真一さん(42)

知的障害者サッカーの世界選手権は「もう一つのW杯」と呼ばれる。2018年ロシア大会への舵(かじ)とりを任された。



「最大限の誠意と時間をもって取り組みます」

「日本一の点取り屋」である。企業やクラブチームが戦う九州リーグのヴォルカ鹿児島(当時)で、フォワードとして活躍。95年から13年間で奪った266点は、同一リーグ公式戦最多得点だ。

節目で失敗してきた。鹿児島玉龍(ぎょくりゅう)高3年のとき、元日本代表の前園真聖(まさきよ)らと国体3位に。鹿屋体大から推薦入試の誘いが来たが、憧れの筑波大を受け、不合格。鹿児島経済大へ進むも、4年秋の消防士試験に失敗。就職浪人した。

勉強、サッカー、アルバイトの日々は充実していたが、翌秋も不合格。後輩の勧めで始良(あいら)町(当時)の職員になった。公務員ストライカーはJリーグ昇格を目指したが、かなわず。「悔いなんかない。いつも桜島が私を見守ってくれた。失敗してもクヨクヨせず、次のシュートを打ってきました」

始良市商工観光課で企業誘致の担当。5年前、地元の知的障害者サッカー関係者が市役所へ来た。「266ゴールの男。」という文章が載った雑誌を握りしめていた。そこで県選抜チームの監督就任をお願いされ、いまに至る。「彼らと一緒にやっていると、情が移るね」。まな弟子の1点に、266ゴールの男は涙をこらえる。(篠原大輔)

## 「異才」を育てる

### (1) 答えのない課題やり抜く

読売新聞 2015年11月05日

特定分野で突き抜けた能力があるのに、学校教育になじめない子どもを支援する「異才発掘プロジェクト」が始まって約1年がたった。才能を伸ばす環境の中で、様々な課題に取り組んだ1期生たちが得たものを探った。

### 人生にとって収穫

「鹿の角でこれを作りました」。9月29日、東大で開かれたプロジェクトを振り返る発表会で、1期生15人のうち、中学3年男子(14)(さいたま市)が大きな鹿の角が柄になった傘を披露した。

鹿の角は、この夏、北海道の原野で行われた課題学習で手に入れた。手間のかかる作業に真剣に取り組ませ、角を削ってフォークやスプーンを作るのが目的だった。

しかし、中学3年男子は「角の形をそのまま生かしたい」と傘の柄にした。その独創性に、保護者ら100人が集まった会場からは、どよめきと拍手がわき起こった。

中学3年男子は数学や物理に詳しく、絵画も得意。自分でプログラミングしたゲームも作る。父(41)が、「頭の回転が速すぎて話についていけないことがある」と語るほどだ。

そんな才能と、「鹿の角」の課題学習とは、一見結びつかない。だが、中学3年男子は「私の人生にとっては、良い収穫だった」と振り返る。

中学3年男子ら4人の参加者は、現地に1週間合宿して馬の世話をし、乗り方を学び、原野を走り回った。持ち帰った角でフォークなどの作り方を職人から学んだ。中学3年男子はインターネットなどで調べて考えた結果、角を切ってフォークなどを作るよりは傘の柄にしたいと思った。

プロジェクトを統括する中邑賢龍・東大教授は、「傘を作るところが溝田君らしい。与えられたテーマだけに縛られない自由な発想で才能を伸ばすプロジェクトの目的にかなっている」と話した。

### 不登校にも変化

中学1年のとき、男子は、理科の知識や実験の力を競うコンテストの県大会に出場した。ただ、自分の思い通りにいかないと、落ち着かなくなると、急に教室を飛び出すこともあった。周囲とぎくしゃくし、中学2年の途中からはほとんど通学していなかった。

「扱いつらい自分でも、学べる場がほしい」。母の牧子さん(44)からプロジェクトのことを聞き、応募した。

プロジェクトで出会った仲間たちは、ピアノのコンテストで数々の入賞歴を持っていたり、1日に100枚以上絵を描いたり、様々な才能の持ち主だった。そして、多くは学校になじめないでいた。そんな彼らも、発表会では、プロジェクトで伸び伸びと活動ができたことを伝えた。

「制限時間がなく、決まった答えもない課題をやり遂げ、自分に自信が持てた」と中学3年男子は胸を張る。落ち着きも取り戻し、今は週に3回ほど学校に通っている。

### 才能見いだす取り組みへ

異才発掘プロジェクト実施の背景には、産業創造につながる斬新な発想が求められる中、日本の学校教育が個性や才能を生かしきっていないという問題意識がある。

「子どもの突き抜けた才能を伸ばす環境がないと、学校になじめず、不登校になることもあり、学べる環境はさらに激減する」とプロジェクトの主催者たちは懸念する。

## 異才発掘プロジェクト

東大と日本財団による教育プログラムで通称「ROCKET」(Room Of Children with Kokorozashi and Extraordinary Talents)

### 対象

1期生(昨年12月から)は、全国約600人の応募者から選ばれた、小学3年から中学3年(応募時)までの男子14人、女子1人の計15人

### 活動内容

ロボット開発、数学、iPS細胞研究、陸上競技など、各界の先駆者による講義、ディスカッション。鹿の角でフォークやスプーンを作るプロジェクトなど3班に分かれた課題学習。希望に応じた個別指導などを行う

こうした中、一人ひとりの子どもの発達や能力の違いに応じ、学校教育を柔軟にしている。こうという議論が始まっている。政府の教育再生実行会議は今年5月、「異能・異才の人材を発掘し、その才能を社会に変革をもたらす可能性があるものとして伸ばすことも重要」と提言。文部科学省は、不登校の児童生徒の受け皿となる民間のフリースクールの支援などを通じて、潜在的な才能を見いだす取り組みの検討を始めた。

## (2) 「好き」を追求新たな一面

読売新聞 2015年11月06日

「香りも味も濃いね」。9月中旬、瀬戸内海に浮かぶ高見島(香川県)で、兵庫県11歳男子と札幌市14歳男子が、郷土料理の茶がゆを食べた感想を漏らした。

2人は、東大と日本財団による「異才発掘プロジェクト」の1期生。突出した才能があるのに学校になじめない子どもを支援する教育プログラムの一環で、高知県大豊町で生産される**碁石茶**について学んだ。高見島の茶がゆも碁石茶を使っており、2人は鍋で煮出して米や芋を入れる作り方も地元の人に教わった。

地域の食文化を守り、物作りの大切さを知るのが今回のテーマで、兵庫県11歳男子は、産地の大豊町も6月に訪問。茶葉を2段階に分けて発酵させる独特の製造法を自宅で試した。だが、「黒カビが発生して、大失敗に終わりました」と打ち明ける。小学生ながら、みそやしょうゆを仕込んだ経験もあり、悔しそうだ。

プロジェクトを統括する中邑賢龍・東大教授は「自分が好きでやっていることを伸ばしていくには、本気さや真剣味が必要なんだと、失敗体験から学んでほしい」と話す。

兵庫県11歳男子は、料理や食材に強い関心がある。母の彩子さん(34)によると、幼児向けの本のレシピを見て、3歳の頃から包丁で野菜を切り、電磁調理器でポトフを作っていた。

料理本を次々と読破し、彩子さんにせがんで買ってもらったお菓子作りのDVDや漫画を頼りにケーキも焼いた。

小学校入学後は、自宅の庭で野菜や果物を栽培。トマトやナス、オクラ、トウガラシ、スイカなどを作り、料理の素材にしている。

興味のあることは、よくできるし理解も早いのが、学校からの連絡を失念したり、持ち物を置き忘れてしまったりしてしまう。同級生と一緒に授業を受けるのが難しく、今年からフリースクールに通い始めた。

しかし、プロジェクトでは異なる一面を見せ、彩子さんを驚かせた。一人で電車を乗り継ぎ、活動場所の東大駒場キャンパス(東京)に通った。高見島で茶がゆを食べた札幌市14歳男子とはタブレット端末で連絡を取り合う仲になった。

「好き」なことを追求するだけでなく、人前で報告もできた。プロジェクトで、兵庫県11歳男子は自給自足の方法について独自の研究も行った。9月末の発表会では、野菜の収穫が少ない時期にシイタケやマッシュルームを栽培した体験などを、集まった保護者ら約100人に紹介した。

「好きなこと以上のことができたと思う」と兵庫県11歳男子。今後は野菜の防虫ネットの改良法を研究するつもりだ。

**碁石茶** 高知県大豊町特産の発酵茶。ムシロで茶葉にカビを付けた後、たるとで乳酸発酵させる。茶葉を切り分けて干すと黒い碁石のような塊になる。

## (3) 自分なりの生き方探し

読売新聞 2015年11月12日

「学校に行かなくても学ぶことはできる」。9月、「異才発掘プロジェクト」の1期生を対象に、東大教授の福島智さんの講義が行われた。

全盲ろう者として初めて正規の大学教員となった福島さんは、障害学などが専門。通訳者が指をタイプライターのようにたたいて伝える「指点字」で相手の言葉を認識しコミュニケーションをとる。

突出した才能を持ちながら学校になじめない子どもを支援するプロジェクトの一環で、



福島さんは、様々な分野で活躍する「トップランナー」の一人として登壇。

目の病気療養で学校を休んだ時期に、落語やSF小説に親しんだ体験が今の自分を豊かにしてくれていることなどを語った。さらに、「ハンディキャップがある人や、学校など集団のルールに適応できない人のことを社会は想定していない。皆が一つのルールに合わせるのではなく、ルールの方が一人ひとりに合わせていく『やわらかい社会』になってほしい」と強調した。

福島さんの話に、1期生の中学2年男子（14）（大阪市）は、「目も耳も不自由な人の気持ちを僕は簡単には理解できない。でも、自分と違う人間がいることを頭に置いておくことは大事だ」と思った。

中2男子は、学校などで予想外の事態が起こると混乱してしまう。小学4年から別室登校を続け、中学1年の6月からは完全不登校になった。

ただ、「幼い頃から読み聞かせに図鑑や専門書を選び、没頭する子だった」と母の雅子さん（49）は語る。歴史、生物、宗教など興味のある分野の知識は大人顔負け。図鑑などを参考に、頭に浮かんだ飛行機や船の模型を厚紙や空き箱で作る。

プロジェクトでは「いすの解体修理」の課題に挑んだ。古い木製のいすを解体して組み直す作業を通し、中2男子は、いすが壊れたらすぐに新品に買い替えてしまう現代社会について考えた。「効率が悪いものは姿を消していき、便利なものばかり増えていく。でも、目先のことばかりで長期的な視点がない社会は失速していくのではないか」

プロジェクトを統括する中邑賢龍・東大教授は、「トップランナーの講義や課題学習に感化され、自分の考え方や新しい生き方を探っていくことに意味がある」と話す。

中2男子の中学校の教員は、時々、家庭訪問をしているが、当初は本人に会えないことも多かった。コミュニケーションは苦手だが関心のあることに集中でき、潜在能力の高さを感じていた。中2男子が1期生に選ばれ、「先進的なプロジェクトに参加できるのは良いことだと思った」という。

最近では、作品を見せてくれたり歴史や仏教の話をしたりと、生き生きした姿を見せるようになった。「能力を発揮する場を得て自信を持てたのではないか」と変化を語る。

中2男子は言う。「将来、何をしたいかは、まだわからない。答えが最初からあるのではなく、自分なりの答えを探し出せばいい。それがプロジェクトに教わったことです」

#### （4）やりたいこと申請し実現

読売新聞 2015年11月13日

突出した才能があるのに学校になじめない子どもを支援する「異才発掘プロジェクト」には、自分がやりたいことを申請できる制度がある。

同プロジェクトは、東大と日本財団による教育プログラムで、「プロの音楽家に自分の演奏を聴いてもらいたい」など、自分の関心事を深める要望は予算の範囲内で認められる。中には海外への研修旅行が実現した例もある。

1期生の中2男子（14）（千葉県）は10月、優れた食器を生み出してきたフランスの食文化や歴史に触れる研修旅行に出かけた。プロジェクトの課題学習で鹿の角を使ったナイフ作りを体験したのがきっかけだった。

欧州の歴史的建造物に関心があり、研修旅行が認められた中1男子（13）（東京都）、英国などの古い食器について調べる研修が認められた中3女子（15）（静岡県）と時期を合わせ、パリを拠点に9日間、各地を回った。

中2男子はフランス南部のラギオール村などを訪問。同村では、鋭い切れ味と優雅なデザインが人気の食器用ナイフの歴史を学んだ。

工房で作業風景を見学したり、職人から話を聞いたり。元々は、牛などの放牧で暮らしていた人たちの作業用ナイフだった。その後、食器として普及し、19世紀以降、パリのレストランなどで使われるようになったことを知った。「地域の伝統を受け継いでいこうとする人たちの力を実感しました」

中2男子は幼いころから好奇心が旺盛で、数学や物理、化学の分野に造詣が深い。手書

きの図でアインシュタインの相対性理論を素人にもわかりやすく説明する。議論好きで、地球の未来を考えるイベントで意見を述べたこともある。

一方、突然の予定変更や時間制限に動揺しやすく、小学校時代は、教室でイスを投げつけるなど授業を混乱させることがあった。文字を書くのも苦手で、母の美保さん（42）は「幼稚園、小学校と皆と同じことができず、自信を失っていた」と話す。

中2男子が中学に入学するとき、美保さんは息子の状態についてイラスト入りの説明文を学校に提出した。中2男子にプロジェクトへの応募を勧めたのも美保さんだった。

学校は理解を示し、中2男子のプロジェクトへの参加や、授業がある時期の研修旅行も認めた。研修の体験をクラスで発表する場を近く設ける予定だ。「学校とは別の場で個性を生かす機会があるのは、いいことだと思う」と担任教諭は話す。

「学校でもプロジェクトでも全てを学べるとは思っていない。でも、もっと経験を積み、自立しなければならぬと痛感しました」と中2男子。今は現地で撮影した写真を整理するなど、同級生たちの前で発表する準備を進める。

#### 申請が認められた事例

- ・ピアノの専門家を招き、自分の演奏を聴いてもらう
- ・ビデオカメラを馬に取り付け、人の視点との違いを比較
- ・フランスなどを訪問し、建造物の歴史を学ぶ
- ・スプレー式絵の具の吹きつけ方による色づけ具合の違いを調べる

#### （5）「学校授業もの足りない」

読売新聞 2015年11月18日

〈学校には毎日通っています〉〈志望動機は、授業が物足りないからです〉

東大などによる「異才発掘プロジェクト」の1期生、中学3年の女子生徒（15）（静岡県）は、プロジェクトの面接でそう答えた。

突出した才能があるのに、学校になじめない子どもを支援する教育プログラムで、昨年12月、約600人の応募者の中から選ばれた15人の1期生の一人になった。

参加者には、不登校だったり、授業中に混乱して教室から突然いなくなったりする子どもが多いが、女子生徒が「なじめない」のは、学校の授業の内容そのものだ。

数学などの演習問題を早く解き終わっても、先に進ませてくれない。余った時間に別の科目の勉強をして、先生に注意されたこともある。

新聞記事を読んで「面白そう」と応募したプロジェクトは、様々な刺激的な場を与えてくれた。得意なバイオリンで、日本フィルハーモニー交響楽団のメンバーと共演させてもらった。関心のある医学の分野で、iPS細胞を研究する理化学研究所の高橋政代さんの講義も受けた。

他の1期生たちからも影響を受けた。少しの時間も惜しんで黙々と絵を描く子、課題がうまくできないと涙を流して悔しがる子……。「はじめは『変な子』ばかりと思ったが、やりたいことに突き進む熱意に圧倒されました」

思えば、「自分も変な子」だ。同世代の中学生在が持つ、おしゃれやアイドルタレントへの興味は、ほとんどない。活字を読むのが好きで、加工食品の包装の原材料や成分表示にまで目を通す。人工臓器に興味があり科学雑誌を定期購読する。「プロジェクトで自分の『変さ』を抱えていく覚悟ができました」と笑う。

女子生徒は、不登校の仲間と接することなどで「教育そのものへの関心も高まりました」と振り返る。欧州の古い食器を調べたいと申請し、実現したプロジェクトの研修旅行でフランスを訪れたとき、路上で物ごいをする親子を見て、「教育が受けられることは幸せだ」と感じた。

通っている中学校では、花壇を整備する園芸委員長を3年生の前半に務め、クラス対抗の合唱コンクールの指揮を3年連続で担当するなどリーダーシップを発揮。「個性や才能を重視するプロジェクト、集団で学ぶ学校教育の両方にメリット、デメリットはある」と話

す。

プロジェクトを統括する中邑賢龍・東大教授からは、「女子生徒みたいな（学校でもうまくやっている）子にも参加してほしい」と言われた。

「学校で居心地の悪い思いをしている子どもを助ける制度作りに貢献できたら」。女子生徒は、学校とプロジェクトの両方で得た経験を生かしたいと思っている。

#### プロジェクトの選考（書類と面接）で聞かれる主な内容

- ・ 志望動機
- ・ 小中学校の登校状況
- ・ 学校に満足しない理由
- ・ 友人関係
- ・ 自己PR
- ・ コンクールなどの受賞歴

#### （6）プロジェクト以外も支援

読売新聞 2015年11月19日

突出した才能があるのに学校になじめない生徒らを全国から発掘して支援する「異才発掘プロジェクト」。これを統括する中邑賢龍・東大教授が9月上旬、鹿児島県霧島市を訪れ、同県内の中学生の保護者8人を前に、「親がかかわりすぎると、我が子の才能が伸びなくなることもあります」と呼びかけた。

保護者たちは、同プロジェクトに関心がある。1人を除き子どもはプロジェクトに参加していないが、中邑教授らスタッフとの懇談を要望し、実現した。出席した清水美代子さん（47）の中学2年の長男は、絵画が得意だが、学校ではクラスになじめず個別の指導を受ける。「学校のことなどであまり口出しせず、できるだけ見守るようにしたいと思った」と清水さんは話す。

「プロジェクトの参加人数には限りがあり、書類や面接で絞らざるを得ないが、できるだけ多くの子どもや保護者と接したい」と中邑教授。

昨年、1期生に選ばれたのは15人。応募した約600人のうち選考に漏れたが支援が必要な約270人には、メールなどでスタッフが学習相談を受けたり、様々な分野で活躍する「トップランナー」の講義を聴いてもらったりする機会を設けてきた。保護者の意見を聞くセミナーなどもこれまでに約40回開いた。

スタッフの1人、日本財団の沢渡一登さんは、「プロジェクトで積み上げたノウハウを、多くの子どもたちの支援に役立てたい」と語る。

プロジェクトの内容を、フリースクールなど不登校を支援する教育関係者らに、広く活用するための取り組みも模索されている。

学校になじめない子どもは、教科の学習は苦手だが、体験活動なら取り組めることが多い。学校の教科の内容習得につながることもある。スタッフで東大学術支援専門職員の福本理恵さんらは、プロジェクトと教科内容との結びつきを調べている。

例えば、今年2月に実施した「イカをさばいてパエリアを作る」という体験活動。1期生たちは作り方を知らされないまま、イカを丸ごと料理用のハサミでさばき、野菜などの具材や米を鍋に加えてパエリアを調理した。

イカをさばくときには、墨袋をつぶさずに取り出すよう指導された。イカの体内の構造をよく観察する必要がある、中学1年の理科で学ぶ「身近な生物の観察」につながる。また、調理に使う米を計量することは、小学5年の算数で学ぶ「単位量あたりの計算」にあたるという。

東京都内の公立小と中学の計2校の協力を得て、生徒らに同様の調理をしてもらったほか、校長の意見も聞き調査を続ける。福本さんは、「一見、教科とかかわりがないように見えても、関連づけられる点が多い。プロジェクトの外でも体験活動を実践できるようにできれば」と話す。

## プロジェクトの体験活動「イカの調理」で学ぶ内容

- ・イカ墨の黒の色素がどのように取り込まれているかを考える→中2理科「動物の行動するしくみ」
- ・イカの教え方の「杯」の意味を知る→中1国語「漢字の成り立ちなど」
- ・イカの産地、水揚げ量、価格などを学ぶ→中1、中2社会「日本の諸地域」、中3社会「消費生活と市場経済」

## (7)「異才発掘プロジェクト」の意義や課題を聞く 読売新聞 2015年11月20日

突出した才能があるのに学校になじめない子どもたちを支援しようと、昨年12月にスタートした「異才発掘プロジェクト」。同プロジェクトを統括する東大教授の中邑賢龍さん(59)と、幅広い分野で評論活動を行う解剖学者の養老孟司さん(78)に、「異才発掘」の意義や課題を聞いた。



### 学校外で多様な学びを...東大教授 中邑賢龍さん

不登校などで学習が困難な子どもにタブレット端末などを提供する支援を2007年から行ってきた。

その中で、特定の分野に飛び抜けた才能を持つ子どもたちがいることに気付いた。彼らの力を安心して存分に伸ばせる場所を、学校の外につくろうと始めたのが今回のプロジェクトだ。

画一的な授業によってオールマイティーで協調性のある子どもを育て、国を支える人材にすることを目指す今の学校教育を私は否定はしない。でも、そこから外れた子どもは放置されたままだ。不登校で自由な時間があるなら、それを最大限に生かし、様々な挑戦をしてほしい。

15人の1期生には、鹿の角を削ってナイフを作ったり、イスを解体して修繕したりする課題を与えた。新品を買うのではなく、自分で手をかければ、昔ながらのモノの大切さに気付くだろう。学校では「扱いづらい」存在の1期生たちが、「自分も捨てたものではない」という意識を持ってもらう狙いがあった。

革新的な発想や発明は、既存の枠組みや常識を飛び越えたところから出てくると思う。異才を認め、学校外に多様な学びの機会を設けた社会を実現させたい。

### 成熟の速度は千差万別...解剖学者 養老孟司さん

ヨーロッパでは、19世紀以降、科学や芸術の分野で非常に優れた個人の存在を重んじ、彼らを「天才」と呼んだ。ノーベル賞が創設されたのもヨーロッパだ。

一方、日本には個々の異質さを排除する空気がある。自分の頭で考えるより、周囲の状況に配慮する「世間」が社会を動かしてきた。

学校教育になじめない「異才」も排除されてきた。だが最近、均質化しすぎた社会では技術革新など起こせないという機運が出ている。異才発掘プロジェクトのような取り組みも、その流れで始まったのでは。

成熟の速度は千差万別で本人に合った「オーダーメイド」の教育が必要だ。子どものときに上手に育ったとしても独り立ちしたら不適應を起こす心配もある。

周囲は、異質さを嫌がったり、邪魔したりしてはいけない。子どもの個性が伸びるのをどう見守るか、大人が真剣に考えるべきだ。全力で自分に向かい合ってくれる大人を子どもは見抜くものだ。

自分の能力をどう生かすかは、最終的には本人が決めなければならない。決断の局面を乗り越えれば、異才は急激に花開くだろう。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

